

“Rise up!”

ヒップホップ・ミュージカル *Hamilton* が体現する
新自由主義的アメリカンドリームの幻想

法学部政治学科

人文科学研究会 卒業論文

2025 年 1 月

福川莉乃

序論

ブロードウェイミュージカル *Hamilton* は、2015 年より上演され続けており、第 70 回トニー賞で 13 部門 16 ノミネートを獲得し、約 10 億ドルの総売上を達成した人気作品である (“Hamilton Broadway Grosses”)。Alexander Hamilton を主人公とし、George Washington, Thomas Jefferson, Marquis de Lafayette 等建国の父祖たちを描くストーリーである。本作品は、ほぼ全てのキャストに人種的マイノリティを起用し、楽曲にヒップホップや R&B といった現代音楽の様々なジャンルが使われており、多様性の価値を観客に訴えようとしている。例えば、建国の父祖役への人種的マイノリティの起用は、社会の周縁にいるマイノリティでも米国は自分の国であると感じさせる事ができる。また、ミュージカルでは殆ど取り入れられることのないヒップホップが本作を彩る事で、貧困や格差から抜け出し、自らが米国を変革しようという建国精神を象徴させている。このように、*Hamilton* は観客に多様性や主権者意識の重要性を伝える一方で、新自由主義的イデオロギーに帰結しているという問題も残る。主人公 Hamilton のような貧困・移民から自助努力で社会のメインストリームに這い上がったというストーリー展開は、成功は個人の努力に委ねられるという自己責任論も象徴しているのだ。タイトルに挙げた “Rise up!” は、劇中歌の “My Shot” において主人公 Hamilton によって歌われるリフレインであり、

自身が貧困から這い上がる事と米国が英国の支配から立ち上がる事という二つの成功が重ねられている。しかし先に述べたように、このシーンで観客に伝わるメッセージは、マイノリティでも活躍できるという包摂性・多様性の賛美と共に、成功のために自助努力をしろという新自由主義の自己責任論でもあると考えられる。本稿では、*Hamilton* がどのように多様性の価値を伝えつつも新自由主義を補強してしまっているか、そして民主党と共和党が *Hamilton* をいかに受容したかを分析する事で、同作に集約される米国の格差と分断の問題を問いたい。

目次

序論.....	2
第一章：多様性の演出－EMINEM から BEATLES, 非白人で固めるキャスト	5
第二章：自己責任論－ <i>HAMILTON</i> が見せるアメリカンドリームの幻想	16
第三章：民主・共和両党の <i>HAMILTON</i> への反応が映し出す、米国の格差と 分断.....	21
結論.....	26
参考文献.....	28

第一章：多様性の演出—Eminem から Beatles, 非白人で固めるキャスト

Hamilton が作品を通して観客に訴えるのは「多様性」だ。特に、ヒップホップをはじめ現代音楽を取り入れる楽曲や、人種的マイノリティで固めるキャストリングから聴覚的にも視覚的にも多様性が表現されている。例えば、劇中の2曲目に登場する“Aaron Burr, Sir”では、主人公 Alexander Hamilton や建国の父祖である Aaron Burr, Lafayette, Hercules Mulligan, John Laurens が登場するが、彼らのキャストは全員プエルトリコ系かアフリカ系である。彼らはラップで自己紹介を交わしているが、そのまま3曲目の“My Shot”に入ると、オーケストラの伴奏が入りミュージカル基調になっている。このシーンに代表されるように、*Hamilton* は人種的マイノリティのキャストと、次々と展開される様々な音楽ジャンルを特徴としていることから、本章ではこれらの演出の効果を論じる。

まず、音楽ジャンルの多様性という文脈では、ヒップホップや R&B といった現代音楽から 1960 年代に流行ったようなポップスまで、異分野に跨る音楽ジャンルが取り入れられている。例えば、建国の父祖たちは The Notorious B.I.G や Eminem に影響を受けたヒップホップを、英国王 George III は Beatles スタイルの英国ポップスを、女性キャラクターである Eliza は Beyonce を連想させる R&B を歌っている。Beuriot によれば、「ハミルトンの登場人物はそれぞれ

特有の音楽ジャンルと結びつけられている」(39)といえ、それ故に *Hamilton* が「様々な聴衆の心に響き、全米で現象を巻き起こしている」(105)とする。つまり、登場人物それぞれを象徴するような音楽ジャンルをあてがう事で人物像を際立たせると共に、各音楽ジャンルのファンに訴えられる包摂性を持っていたと考えられる。

では、ここからは Beuriot の議論に依拠しつつ、*Hamilton* においてヒップホップ、英国ポップス、R&B がそれぞれどのように多様性と包摂性を演出する効果を持つのかそれらの役割を考察していこう。

まず、ヒップホップから連想されるのは「革命」であり、建国の父祖たちがヒップホップを歌う事で彼らの変革精神を表現していると考えられる。ヒップホップは、歌い手であるラッパーが自身を社会に認めてもらう手段といえる。

Bradley は「黒人の若者たちが、自分たちを否定する権力に代わる何らかのパワーを追求した結果」としてラップが生まれたと述べる(159)。黒人差別や貧困に直面する彼らが、社会の周縁としての自分を受け入れることなく自身の存在を社会に訴えかける事で、自身の立ち位置、そして自分たち黒人への社会の見方を変革させようとしている。例えば、Big Daddy Kane による“Wrath of Kane”は、人生で直面した不当な仕打ちに報復を求める人物 Kane の生き様をラップで表現した曲である。歌詞には“Be the Most and Boast the LOUDEST

RAP Kane'll REIGN your doMAINE! (Yeah, KANE!)” [最も大胆で声を上げるラップになれ！Kaneがお前の領域を支配する！（そうだ、Kaneだ!)] “Caus I can never let'em on top of me.” [奴らを俺の上へのさばらせないからだ]と、“All foes, I keep 'em running like pantyhose. They get soft and tender, front and then surrender. I turned off more lights than Teddy Pendergrass. Bring on your class, force, team or staff. But when I'm in effect they feel the wrath. Of Kane.” [すべての敵に、パンストの断線のように切り込んでやる。奴らは態度を和らげ、前に出て、そして降伏する。俺はテディ・ペンダーグラスより多くのライトを消した。お前のクラス、力、チーム、それかスタッフを連れてこい。俺を前にして、奴らは怒りを感じる Kane のな！]等とあり、ラップによってKaneの怒りをぶつけ“奴ら”を降伏させると歌っている。「奴ら」は特定されていないが、「すべての敵」、「お前のクラス、力、チーム、それかスタッフ」と歌っている事から、クラス=階級、権力、集団といった社会を支配するもの全体へ怒りをぶつけ、自分の存在を認めさせようとしている事がわかる。

従って、ヒップホップは自分たちに対する社会の意識を変えようとするものである。オバマ大統領（当時）は“Rap is the language of revolution.”と表現しており、ヒップホップはまさしく「革命の音楽」といえる。Beurriotによると、*Hamilton* がヒップホップを取り入れる事は、「ヒップホップ界の著名人物たち

のように、言葉を駆使してみじめな境遇から抜け出そうとする、若くて行動力あふれる反逆者たちの物語を伝えるのに適した方法」なのだ (102)。即ち、建国の父祖たちは「反逆者」であり、ラップによって自身の境遇や社会を変革しようとする思いを表現しているのだ。

反逆児として描かれる建国の父祖の具体的な例として、主人公 Hamilton と、戦友 Lafayette のラップを取り上げよう。Hamilton のディレクターである Tommy Kail は、「Hamilton は深刻な貧困、親なし、支援なしという非常に困難な境遇に生まれながら、言葉を使ってその境遇から抜け出し、そしてその言葉によって非業の死を遂げた人物だ。これは典型的なヒップホップのストーリーである。Tupac や B.I.G と同じストーリーだ」と述べる (Hooton)。Hamilton は政治家として、憲法起草者として、言葉によって社会を動かした人物であるから、言葉巧みなラップによって社会に訴えかけるヒップホッパーと重なるのである。特に、Hamilton の歌う“My Shot”はアメリカのギャングスタ・ラッパーである The Notorious B.I.G から強く影響を受けており、「Hamilton が自らの名前を“A-L-E-X-A-N-D/-E-R -we are – meant to be.”と歌う場面は、The Notorious B.I.G が *Going Back to Cali* (1997) の楽曲内で“*It’s the N-O,T-O, R-I, O/ U-S, you just, lay down, slow.*”と歌う場面を直接参考にしている」(Beuriot 12)。同曲は、Beuriot の指摘する通り、曲のリズムが酷似していると共に、歌

詞も自分が何を成し遂げたいと思っているのかを語るという内容で The Notorious B.I.G の曲と類似する。従って、Hamilton の歌う “My Shot” は The Notorious B.I.G を連想させることで、彼の変革者たる人物像を強調していると考えられる。

また、Lafayette がラップする “Guns and Ships” はアメリカの白人ラッパー Eminem と結びついている。FiveThirtyEight の分析によると、これはブローウェイ史上最速のラップであり (Libresco)、Eminem は “Rap God” で最速のラップとしてギネス世界記録を持っていた事から (Guinness World Records)、Lafayette が唄うのを聴けばすぐに Eminem の速さが連想されるだろう。曲の速さのみならず、歌詞の内容も共通している。Lafayette は “Guns and Ships” で “And I’m never gonna stop until I make ‘em drop and burn ‘em up and scatter their remains, I’m-Lafayette!” と歌い、英国軍への勝利に対する燃え盛る思いを表現している。一方、Eminem は “Rap God” で “I’m beginnin’ to feel like a Rap God, Rap God” と歌う通り、ラップの神に成り上がるという自らの野心を表現している。Malone によると、*Hamilton* の脚本を手掛けた Lin-Manuel Miranda が Eminem の影響を強く受けていると発言しており、この事実からも高速のラップや野心を表現する歌詞から Lafayette と Eminem は深く結びついており、建国の父祖としての変革精神を表現していると言えるだろう。

Hamilton と Lafayette は男性であるが、女性キャラクターがラップを歌う場面もあり、革命とまでいかないまでも社会の理不尽さに対して異議申し立てをしている。その代表例は、富豪一家 Schuyler 家の長女で、Hamilton の妻 Eliza の姉である Angelica が歌う“Satisfied”である。この曲では、女性がラップを歌う事で社会における男女格差が表現されていると考えられる。Beuriot は「Angelica のラップは、アメリカの最も有名な女性ラッパー、Nicki Minaj の“Super Bass”という曲のラップとほとんど同じだ。」(35)と指摘する。確かに、YouTube 上で“Satisfied”の曲に“Super Bass”のラップを被せた“Satisfied ft. Nicki Minaj(Hamilton×Super Bass Mashup)”¹という動画が投稿されている程、この二曲は類似しているといえる。一般のファンがこうした動画を挙げる程、“Satisfied”を聴いて“Super Bass”が連想されるのであれば、Angelica の人物像に Nicki Minaj が重なる効果を持つといえる。Angelica が Nicki Minaj のラップ調で激しく歌うのは、妹のために自己犠牲する切なさに加え、“I’m a girl in a world in which my only job is to marry rich”と女性として固定的な生き方に縛られる不自由さである。Nicki Minaj は“Super Bass”をヒット曲としてラップ界のスターに躍り出たといえるが、2017 年にはツイートで「どの分野でも、女性は男性の同僚が得る尊敬の半分を得るために、男性の同僚の 2 倍努力しなけ

¹ <https://youtu.be/XvrnMoQdsww?si=EFP1m6pr3ZrupV6x>.

ればならない。」や「偉大な MC たちが Drake、Kendrick、J. Cole とコラボしたのは、彼らが素晴らしい MC だからだ。Nicki とコラボするのは、誰かが彼らの頭に銃を突きつけたからよ」と、ヒップホップ界の性差別について投稿している (*Billboard Japan*, “ニッキー・ミナージュ、ヒップホップ界の性差別についてツイート「女性は2倍努力しても、半分の尊敬しか得られない」”)。Nicki Minaj は数少ない女性ラッパーの1人として、男性の多く占めるラッパー界に挑んできた。従って、彼女を象徴する“Super Bass”と Angelica の“Satisfied”が重なることで、2人に共通する男性優位社会における女性の生き辛さを際立たせている。従って、ヒップホップは「革命の歌」として、Hamilton、Lafayette といった建国の父祖の野心と社会に対する変革精神を表現すると共に、Angelica からは男性優位社会への問題提起を投げかけているといえる。変革や反逆を表現するヒップホップとは対照的に、英国王 George III が歌うのは英国ポップスである。Beuriot はこれを “old-school British Invasion pop” [時代遅れで侵略的な英国ポップス] と表現している (39)。Beuriot によれば、George III の歌う “You’ll Be Back” は Beatles の音楽、例えば “Penny Lane” と酷似しており、英国を越えて米国でも人気を博した事で「侵略的」と共に、ヒップホップを歌う米国側の登場人物との時代錯誤感を際立たせるという (39)。確かに、“You’ll Be Back” と “Penny Lane” はピアノやギターによる和音の

連打によるリズム、コード進行といった点でかなり似ている。Beatles は 1960 年代に流行しているから、George III と 60 年代のブリティッシュポップスが結びつくことになるが、Lafayette や Angelica といったアメリカ側の登場人物が現在も活動中のアーティストである Eminem や Nicki Minaj を連想させるのはかなり対照的である。従って、半世紀前に活躍した、且つ英国のアーティストを George III にあてがうことで、革新とは相容れない、保守的で時代遅れな権力主体である事を際立たせるのだ。

次に分析したいのは、ハミルトンの妻となる Eliza の歌う“Helpless”だ。これは R&B スタイルの曲であり、恋愛の高揚感を観客に伝えている。Beurriot によれば、同曲は Beyonce の“Countdown”を参考にした形跡があるという。Eliza の歌う“Two weeks later / In the living room stressin’ / My father’s stone-faced / While you’re asking for his blessin’.”（「2 週間後、リビングルームでストレスを感じながら、父は無表情だった。あなたが父の祝福を求めている間、」）は、Beyonce の歌う“Me and my boo in the couple lip lockin’ / All up in the back because the chicks keep flockin.”（「私と私の恋人は、唇を重ね合っている。 / みんな後ろに集まっている。なぜなら、女の子たちが群がってくるから。」）と同じカデンツなのだ（Beurriot 33）。確かに、これらの 2 曲は同じ韻律、同じ弱強格である。また、Beyonce の“Countdown”が恋に落ちた女性の高揚感を歌っ

ているため、“Helpless”における Eliza の Hamilton に対する恋心と重なる。従って、音楽的にも場面的にも、“Helpless”を聞くことで Beyonce の R&B スタイルが連想され、恋の高揚感を聴衆に届けていると考えられる。

このように、革命のヒップホップ、時代錯誤的な英国ポップス、恋愛の R&B といった多様な音楽ジャンルが織り込まれる事で、それぞれの音楽が登場人物の立場や内心世界を浮き彫りにしている。また、The Notorious B.I.G, Eminem, Nicki Minaj, Beatles, Beyonce といった様々なアーティストへのオマージュを捧げる事で、*Hamilton* は多方面のファンを取り込める包摂性を有していたのだ。

次に、キャストの人種的多様性の文脈においては、“カラーコンシャス・キャスティング (color-conscious casting)”の手法が取られている事を指摘できる。カラーコンシャス・キャスティングとは、「人種差別に対抗し、文化を尊重し、敬意を表するために、俳優と彼らが演じるキャラクターの人種と民族性を意図的に考慮する」(Eyring)と説明されるように、役者の人種を活かして配役するキャスティング方法だ。*Hamilton* では、建国の父祖たちが白人であったにも関わらず人種的マイノリティがあえて起用されている。脚本を手掛けた Miranda によれば、建国の父祖はヒップホップを歌うべきであるがゆえに、非白人の役者に演じられるのが妥当で、それはヒップホップが白人の音楽でない

からだと述べる(Monteiro)。先に述べたように、ヒップホップが歌手の境遇と彼らを取り巻く社会を変革する音楽だからこそ、米国に変革を起こそうとする建国の父祖たちの精神を伝えられるのである。従って、歌手も現状の苦境を打破しようとする人物像であるべきで、社会の周縁に立たされる人種的マイノリティを起用しようとする試みは理に適う。また、Mirandaが「本作では、既に死んでいる昔の白人の物語を描いているが、有色人種の演じ手を起用することで、物語が現代の聴衆にも理解されやすくなっている」(qtd. in DiGiacomo)と述べるように、人種的マイノリティであっても自分はアメリカ国民である、という意識を持たせる事を狙っているという。事実、Aaron Burrを演じたアフリカ系のLeslie Odom Jr.は「アフリカ系アメリカ人として以前は共感できなかったものを今は感じる」、Elizaを演じた中国系のPhilippa Sooは「人生で初めてアメリカ人だと自覚した」(qtd. in Beuriot 49)と述べる。つまり、俳優の人種や民族を意識したキャスティングの効果とは、建国の父祖たちの社会変革への野望を表現できると共に、人種的マイノリティにも米国を自分事として直視するように促す事であるのだ。

このように、*Hamilton*は米国社会の理想となる多様性を、多岐にわたる音楽ジャンルとカラーコンシャス・キャスティングによって観客に訴えている。建国の父祖たちの変革精神を表すヒップホップ、時代錯誤を強調する英国ポップ

ス、恋の高揚を意識させる R&B といったように、登場人物の異なる思考をそれぞれ音楽で表現すると共に、各音楽ジャンルのファンを惹きつける包摂性を持っている。また、あえてキャストに人種的マイノリティを起用する事で、建国の父祖たちの米国を変革させようとする精神を視覚的に表現すると共に、人種的マイノリティであっても米国の一員としてこの建国精神を共有していると伝えているのだ。社会の周縁にいると感じているマイノリティが、この米国は自分たちの国でもある、と視覚的に気付かせる事で、多様な人種や民族が社会に包摂されている事を訴える効果があると考えられる。

第二章：自己責任論—*Hamilton*が見せるアメリカンドリーム of 幻想

第一章で示唆したように、*Hamilton* は多様性の価値を賛美しながら、米国の社会問題に根本的には切り込めていない。Beuriot は、物語が白人のヒーローたちに依存し、“bootstrapping”すなわち自己責任論を肯定している故に、本質的には *Hamilton* が「白人のミュージカル」であるといえたと述べる。

N.M. Rooks の定義によれば、“bootstrapping”とは、「個人の努力、勤勉さ、自己責任によって社会的・経済的階級をのしあがる事」であり、靴紐を引っ張って自分を持ち上げるという無理を試みる程、人の手を借りない努力で自分を良くさせる事だ。*Hamilton* において建国の父祖を人種的マイノリティのキャストで描くという事は、白人に虐げられた黒人という歴史的構図が矮小化されるという問題があると共に、マイノリティであっても自助努力によって社会のメインストリームになれるというアメリカンドリームの肯定であることはすでに確認した通りだ。

前者の問題である黒人問題の矮小化について Monteiro は、本作において建国の父たちである白人ヒーローしか登場せず、独立戦争の立役者となった黒人奴隷の存在を除外していると批判する。数多くのアフリカ系が大陸軍として参戦したが、そうした奴隷の犠牲と貢献は語られず、人種差別問題はされている。

むしろ“Cabinet Battle#1”において Hamilton が Jefferson に“Your debts are paid cuz you don’t pay for labor”と Jefferson の農園での奴隷労働を批判しており、Hamilton は Jefferson を批判する事で自分が奴隷問題に加担していないかのような立ち位置に見える。しかし、Hamilton も妻の実家である Schuyler 一家のために奴隷を買うなど、奴隷問題に無縁だったわけではない(Klein)。このように、建国の父祖たちを人種的マイノリティでキャストイングした事で、事実上で彼らに加担した奴隷問題は見えづらくなり、結局白人ヒーローの賞賛というプロットになっているといえる。

自助努力論が肯定されている問題について、Beuriot は、アメリカは沢山の機会に溢れているので、どんな生い立ちや社会的地位にあっても、誰でも努力すれば成功して金持ちになれる、という Miranda の信奉が *Hamilton* に反映されていると述べる(83)。即ち、新自由主義の肯定といえる。David Harvey によると、新自由主義とは「私有財産権、個人の自由、無規制市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの中で、起業的自由を最大化することによって人間の幸福を最も向上させられるとする政治経済的理論」である(22)。つまり、政府による保護貿易や規制、社会保障制度ではなく、個人の自由が幸福をもたらすという自己責任・自助努力のイデオロギーである。作品内において新自由主義的イデオロギーが表出されている例としては、オープニングの“Alexander

Hamilton”が挙げられる。ここでは、主人公 Hamilton が生い立ちを歌っている。

How does a bastard, orphan, son of a whore and
a Scotsman, dropped in the middle of a forgotten
spot in the Caribbean by Providence impoverished in squalor
grow up to be a hero and a scholar?

The Ten dollar, founding father without a father
got a lot farther by working a lot harder
by being a lot smarter by being a self-starter
by fourteen, they placed him in charge of a trading charter

[中略]

Scannin' for every book he can get his hands on
Plannin' for the future, see him now as he stands on
The bow of a ship headed for a new land
In New York you can be a new man (x4) In New York (New York) Just you
wait (x3)

このオープニングで、Hamilton がカリブ海で私生児として生まれ、父を持たずして自身の勉学の努力と“self-starter”の起業家精神によってのし上がってきた事が紹介される。まさにアメリカンドリームストーリーというべきプロットが冒頭で示される事で、自助努力による階級上昇が主題として提示される印象を与えると考えられる。また、Hamilton がカリブ海に生まれ New York で学び弁護士となったという移民ストーリーは、それを演じる Lin-Manuel Miranda や、彼が歌うヒップホップによっても強調されているといえる。Miranda はプエルトリコ系移民の 2 世であり、自身を Hamilton 役に起用する事で移民魂を視覚的に表現する。彼の歌うヒップホップは、前章でも述べた通り社会の周縁の立場から自身の野心を表現する音楽だ。特に、“My Shot”が影響を受ける The Notorious B.I.G は、カリブ系移民が多く居住し犯罪と麻薬が蔓延するニューヨークのベッドスタイで育ち、麻薬売人から人気ラッパーへとの上昇した人物である。The Notorious B.I.G 等のラッパーを彷彿とさせる Hamilton の楽曲は、マイノリティの立ち位置から自身を社会に向けて強烈に表現する精神を、聴覚的に感じさせるのだ。このように、Hamilton=Miranda=The Notorious B.I.G 等のラッパー、という構図は、貧困やマイノリティから社会的地位を駆け上ったという点で共通点を感じさせ、キャストや音楽を通してアメリカンドリームを強調する効果を持っていると考えられる。

しかし、現実において全ての人にアメリカンドリームが担保されているとはいえず、資本主義の下で社会格差が開いていることは言うまでもない。

Sherman によると、国勢調査局の統計において国民の所得を 9 カテゴリーに分けた際、真ん中のカテゴリーとなる 5 万~7 万 4999 ドルには最も多くの世帯が属しており、全世界帯に占める割合が 1970 年時点で 23.5% だったのが、2021 年時点で 16.2% に減少した。更に、2021 年時点では世帯所得の平均値が中央値を 44.5% 上回る事から、中間層が縮小して富裕層の所得のみが大幅に伸びている事が示唆される (Sherman)。建国の父祖たちの人生を群像劇として描きつつも、奴隷制や社会格差といった米国の抱える問題に殆どスポットを当てていない *Hamilton* は、過去の「偉大な白人男性たち」の個人的な信念や努力を伝えながらも、米国がこれまで抱えてきた社会問題を可視化できていないのである。

第三章：民主・共和両党の *Hamilton* への反応が映し出す、米国の格差と分断

本章では *Hamilton* が民主党側と保守党側それぞれに与えた影響を分析することで、同作が米国社会で実際にどのような影響を与えたのかを論ずる。まずははっきりしているのは、*Hamilton* と民主党が共存共栄の関係にあるということだ。というのも、*Hamilton* は度々民主党の資金集めに貢献した一方、民主党は *Hamilton* に宣伝機会を提供してきたからだ。初めて *Hamilton* の歌が披露されたのは 2009 年にオバマ大統領（当時）が主催したホワイトハウスのパーティーであり、2016 年の大統領辞任時にもホワイトハウスで披露されている (PBS)。オバマ夫妻以外にも、ヒラリー・クリントンやバイデンも観劇に訪れ、「大統領一家の観劇は本作の人気の火付け役となった」 (Taylor)。つまり、*Hamilton* は大統領からの注目やホワイトハウスでのお披露目により、明らかに恩恵を受けてきたのだ。

さらに *Hamilton* は、「選挙期間中には政治家や有名人が定期的に観劇に訪れ、彼らのキャンペーンの材料として利用され」、特に民主党の資金集めに貢献してきた (Taylor)。Lauer によると、2016 年の大統領選において *Hamilton* は民主党候補のヒラリー・クリントンの資金源の一つとなっており、ヒラリー支援という名目で 1 チケット 2,700 ドル~10 万ドルで追加公演が組まれたりしている。このように、民主党と *Hamilton* は、「多様性」というイデオロギーの

みならず、宣伝や資金集めといった現実的な利益の上でも密接に結びついてきたといえる。

しかしながら、ここで特に注目したいのは、民主党と *Hamilton* が経済格差という米国の根本的課題に切り込めていない点でも共通していることだ。2009年に Miranda が民主党のオバマ大統領（当時）を前に *Hamilton* を披露した際に明らかになったのは、努力すれば誰でも成功できるという先述の

「bootstrapping」の思想から両者共に離れられていない事だ。Miranda が *Hamilton* を、貧乏な私生児として生まれながらも建国の父となった「ヒップホップを体現する人物」だと紹介すると、オバマは *Hamilton* を“the original hustler”[どんな状況でも生き残る元祖サバイバー]だと称えた(qtd. in Kajikawa, 333)。自身の野望と成り上がり人生を歌うヒップホップと、アメリカンドリームの典型である *Hamilton* を重ねた上で、オバマが「ハスラー」としてそれを肯定した事は、（構造的差別や格差に目を瞑りつつ）成功は個人の努力で掴むものという自助努力による立身出世を謳う新自由主義を賞賛しているといえよう。この場面について、Kajikawa は “represents an ideal masculinized subject for the dog-eat-dog world of Revolutionary America-cum-entrepreneurial capitalism”[アメリカにおける起業家精神的資本主義の弱肉強食な世界で生きる上で、男性化された理想像を象徴する](333)と分析している。経済的公正を気

にすることなく人種の多様性を謳歌するハミルトンの姿勢は、現在の政治における緊張を反映していると Kajikawa が述べるように、*Hamilton* とオバマ政権を生み出した民主党は構造的な社会格差を問えていないのだ(337)。

では、次に保守側の *Hamilton* に対する反応を確認していこう。2016 年、次期副大統領（当時）のマイク・ペンスがハミルトンの観劇に訪れた事が、多様性をめぐる対立を象徴しているといえる。*The New York Times* によると、上演後キャスト陣が舞台上から以下のメッセージをペンスに読み上げたという。

私たちは多様なアメリカ人であり、新政権が私たち、私たちの地球、私たちの子供たち、私たちの両親を守ろうとせず、私たちの不可侵の権利を取り上げようとしないう不安を感じています。本作が、アメリカの価値観を守り、私たち全員のために働くよう、あなたを鼓舞したことを心から願っています](*The New York Times*, “‘Hamilton’ had some unscripted lines for Pence. Trump wasn’t happy.”)

舞台上からは歓声と次期副大統領へのブーイングがあった一方、ペンスは最後まで聞いた上で劇場から立ち去り、後日 *Hamilton* からのメッセージによって攻撃はされていないと述べた(qtd. in Bradner)。しかし、キャスト陣からの「私たち全員のために働いて」といったメッセージに対する返答はせず、彼らによる多様性・包摂性の訴えを受け流しているかのように捉えられる。また、

トランプ次期大統領（当時）がツイッター上で「昨晚の *Hamilton* のキャストはマイク・ペンスにとっても失礼であった。謝れ！」(qtd. in Bradner)と批判した。

Hamilton の役者・観客とペンス・トランプの間の対立したやり取りは、米国全体の分断を象徴しているかのようである。*Hamilton* を観るニューヨークを筆頭とする左派エリート層や人種的マイノリティと、トランプ支持層であるラストベルトの白人保守層は相容れる事がない。ハミルトンのキャストとペンスの間で対話がなかった事は、アメリカ社会における左派と右派の分断を例示しているほか、トランプの攻撃的な態度は、彼の支持州となる非沿岸部に住む白人非エリート層が移民や多様性を自身への攻撃と受け止める傾向と重なる。従って、劇場での対立的一幕は、米国社会全体の分断を顕していると考えられる。

加えて、本作がリベラルな価値観を体現し、リベラルな聴衆を惹きつけた一方で、保守派のペンス次期副大統領も観劇に行ったという事実は、前述した *Hamilton* の体現する新自由主義、個人主義や自己責任論を裏書している。

Kajikawa も、*Hamilton* と保守派の親和性を以下のように述べている。

リベラルなファンは、このミュージカルが移民や有色人種を指導的役割や国の歴史の中心に据えていることを称賛できるのに対し、保守的なファン

は、努力さえすれば誰でもアメリカで出世できるという立場を表明する作品と解釈する(340)。

このように、前章で述べた *Hamilton* の個人主義的テーマは、保守層にも響くようになっているのである。

換言すると、*Hamilton* が示唆する、成功は個人の努力に委ねられるという新自由主義的イデオロギーは保守派にも受容されているのであり、ペンスの観劇がそれを物語る。だが同時に、ペンスおよびトランプとリベラルな *Hamilton* の観客との対立は米国全体の分断までも象徴しているのだ。

結論

Hamilton は、多彩な音楽ジャンルや人種を意識した配役といった演出によって、多様性の価値を観客に意識させようとしている。ヒップホップによる建国の父祖の変革の叫びや人種的マイノリティで固めたカラーコンシャス・キャスティングは、米国が多様な人々で成り立ち、観た者に自分も社会の一員として米国の未来を創る力と責任がある事を感じさせる。しかし、こうした聴覚的、視覚的な演出によって「ポジティブな多様性」の価値を訴えながらも、人種差別や社会格差といった「負の多様性」に直接スポットライトを当てる事はできなかった。*Hamilton* のプロットは建国の父祖の偉業を語る英雄譚であり、個人の努力を讃える一方で、奴隷制度、人種隔離や階級格差といった社会問題を浮き彫りにしてはいないからだ。むしろ、Hamilton という移民でありアメリカ革命の中心人物とブロードウェイにヒップホップ的要素を取り入れた「革命児」であり移民二世である Lin-Manuel Miranda、そして「革命の音楽」とされるヒップホップの三者が結びつく事で、社会の周縁から個人の努力でのし上がったという、移民による新自由主義的アメリカの夢物語を強調している。このように個人主義に帰結してしまう *Hamilton* のストーリーは、民主党が格差是正に対処できていない現代政治を反映している。また、*Hamilton* を巡る対立は、リ

ベラルが共感の眼差しで「非合法移民」と呼ぶ人々をトランプ支持者たちが「不法移民」として敵視しているように、米国社会の分断とも重なるのである。*Hamilton* が多様性や個人の努力を賛美しながらも、深刻化する社会問題を周縁化・不可視化させていることは、新自由主義によって分断に晒される現代の米国社会を如実に反映していると言えよう。

参考文献

<日本語>

Billboard Japan, 「ニッキー・ミナージュ、ヒップホップ界の性差別についてツイート「女性は2倍努力しても、半分の尊敬しか得られない」, 2017年10月27日, https://billboard-japan.com/d_news/detail/56875/2, 最終閲覧2024年12月29日。

Sherman, Erik. 「米国の所得格差拡大、すでに「通常」をはるかに超えている」, *Forbes Japan*, <https://forbesjapan.com/articles/detail/65155/page2>, 2023年8月11日、最終閲覧日2025年1月30日、

<英語>

Beuriot, Juliette. “Diversity in American Musicals: an analysis of Hamilton,”
Universite le Havre, 2018, Master’s thesis.

Brander, Eric. “Mike Pence; ‘I wasn’t offended’ by message of ‘Hamilton’ cast,”
CNN Politics, 20 Nov, 2016,
"https://edition.cnn.com/2016/11/20/politics/mike-pence-hamilton-

message-trump/index.html." Accessed 30 Dec. 2024.

Bradley, Adam. *Book of Rhymes: The Poetics of Hip Hop*. 2nd ed. Basic Civitas, 2009.

CBSN. "Hamilton cast performs —Alexander Hamilton at the White House," *You Tube*, 15 Mar. 2016,
<https://www.youtube.com/watch?v=ZPrAKuOBWzw>. Accessed 30 Dec. 2024.

David Harvey, "Neoliberalism as Creative Destruction," 2007, SAGE.

DiGiacomo, Frank. "Hamilton's Lin-Manuel Miranda on finding originality, racial politics and why Trump should see his show." *Hollywood Reporter*, 12 Aug. 2015, "https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-features/hamiltons-lin-manuel-miranda-finding-814657/". Accessed 14 Dec. 2024.

Eyring, Teresa. "Standing Up for Playwrights and Against 'Colorblind' Casting." *American Theatre*. 7 Jan. 2016, Accessed 14 Dec. 2024.

Guinness World Records. "Jennifer Lawrence, *Game of Thrones*, *Frozen* among New Entertainment Record Holders in Guinness World Records 2015." 3 Sep. 2014,

<https://www.guinnessworldrecords.com/news/2014/9/jennifer-lawrence-game-of-thrones-frozen-among-new-entertainment-record-holders-in-guinness-world-records-2015-book-60021>. Accessed 27 Jan. 2025.

“Hamilton Broadway Grosses,” *Broadway.com*,

<https://www.broadwayworld.com/grosses/HAMILTON>. Accessed 14 Dec. 2024.

Hooton, Amanda. “How hip-hop and history inspired Hamilton,” *The Sydney Morning Herald*, 22 Feb. 2020,

<https://www.smh.com.au/culture/theatre/our-own-form-of-protest-how-linking-hip-hop-and-history-turned-hamilton-into-a-surprise-hit-musical-20191223-p53mj8.html>. Accessed 30 Dec. 2024.

Kajikawa, Lauren. “Young, Scrappy, and Hungry – Hamilton, Hip Hop, and Race,” *Music in Black American Life, 1945-2020: A University of Illinois Press Anthology*, University of Illinois Press, 2022.

Klein, Christopher. “Alexander Hamilton’s Complicated Relationship to Slavery,” *History.com*. 16 Oct. 2020, <https://www.history.com/news/alexander-hamilton-slavery-facts>. Accessed 31 Dec. 2024.

Lauer, Alex. "Six ways the musical "Hamilton" changed American Politics,"

InsideHook, 2 July 2020, <https://www.insidehook.com/culture/how-hamilton-musical-changed-american-politics>. Accessed 30 Dec. 2024.

Libresco, Leah. "'Hamilton' would last 4 to 6 hours if it were sung at the pace of

other Broadway shows," *FiveThirtyEight*, 5 Oct. 2015,

<https://fivethirtyeight.com/features/hamilton-is-the-very-model-of-a-modern-fast-paced-musical/>. Accessed. 30 Dec. 2024.

Malone, Chris. "Lin-Manuel Miranda says how common, Eminem & more

inspired 'Hamilton' Characters," *Billboard.com*, 2 Nov. 2017,

<https://www.billboard.com/music/rb-hip-hop/lin-manuel-miranda-common-eminem-inspired-hamilton-8022853/>. Accessed 29 Dec. 2024.

Monteiro, Lyra. "Race-Conscious Casting and the Erasure of the Black Past in

Lin-Manuel Miranda's *Hamilton*." *The Public Historian*. Vol.38.1, 2016.

The New York Times, "'Hamilton' had some unscripted lines for Pence. Trump

wasn't happy," 9 Nov. 2016,

<https://www.nytimes.com/2016/11/19/us/mike-pence-hamilton.html>.

Accessed 30 Dec. 2024.

Rooks, N.M. "The Myth of Bootstrapping," *TIME*, 7 Sep. 2012,

<https://ideas.time.com/2012/09/07/the-myth-of-bootstrapping/>. Accessed
14 Dec. 2024.

Shishko, B. "Lin-Manuel Miranda: Hamilton, a New Era of Broadway Musicals."

Thesis. Vol. 8. Iss. 1. Pristina: AAB College, 2019: 69-83.

Taylor, Jessica. "Donald Trump Calls for 'Hamilton' Cast to 'Apologize!' After

Cast Delivers Statement to Mike Pence," *NPR*, 19 Nov. 2016,

<https://www.npr.org/2016/11/19/502687591/hamilton-to-pence-we-are-the-diverse-america-who-are-alarmed>. Accessed 30 Dec. 2024.